

世界へ発信！

北の縄文だより

vol.7



～みんなの知らない「JOMON World」～

社会教育課社会教育・文化財グループ (☎ 74-3010)

縄文人の祈り～土偶～

土偶って何？

縄文人が使っていた道具には、大きく分けて縄文土器や矢じり、釣り針といった、暮らしに直接関わるものと、現代の私たちには使い方がよくわからないものがあります。

その代表ともいえるのが「土偶」です。土偶は、安産などを願う縄文人の女神だという説、精霊の仮の姿を現しているという説、「死と再生」のシンボルとして作られたという説などがあります。

こうした説からわかることは、土偶は縄文人が持つ共通の世界観から作り出されたもので、縄文人の心のあり様を知る手がかりとなるということです。

土偶は縄文時代を通じて見つかったことから、縄文土器とともに、縄文人の世界観をもっとも映し出しているといっても良いでしょう。

いろいろな土偶

土偶はつくられた時期によっていろいろな形があります。縄文時代の始めのころは頭や手足を簡略化された抽象的なものだったのが、縄文時代中期になると、板状の体に顔、腕、腹部、乳房などが表現されるようになります。

また、長野県の「縄文のビーナス」として知られる土偶のように、立体的な表現もみられるようになります。

後期には、北海道が誇る国宝『中空土偶』が、さらに晩期には有名な「遮光器（しゃこうき）土偶」が作られました。



中空土偶



遮光器土偶(レプリカ)
※つがる市教育委員会所蔵

高砂貝塚で見つかった土偶

高砂貝塚からは縄文時代晩期（約3千年前）に作られた土偶が5点、見つかっています。そのうちの1点は、直径50cmくらいの範囲に円形に石を並べた「配石遺構」の中から見つかりました。土偶は、長さが6.7cm、厚さが1.7cmの板状で、片方の腕が欠けていて、頭を北に向けた状態で置かれていました。

さらに土偶の下を掘ると、3個の縄文土器が供えられたように置かれた状態で発見されました。中央の土器には真っ赤な顔料であるベンガラが満たされており、左右の土

器には小魚の骨や貝がらの欠片が残っていました。

こうした発掘調査の状況から、まず、穴を掘って、底にベンガラや食べ物が入った土器を供えて埋め、再生の願いを込めて土偶に祈ったのではないかと考えられます。

土偶に込められた縄文人の祈りを考えたとき、彼らが日々の暮らしの中で育んだ、豊かな世界観が広がっていることに気がつきます。こうした「心の文化」こそが、縄文文化の大きな特色であり、世界遺産登録へ至った理由の一つでもあります。



高砂貝塚の土偶



「配石遺跡」で見つかった土偶



土偶の下から見つかった縄文土器

【入江・高砂貝塚からのお知らせ】

入江・高砂貝塚が世界遺産に登録されてから、多くの人が見学に訪れ、注目度も高まっています。

そこで、令和4年度は、冬期間も「入江・高砂貝塚館」を開館いたします。

この機会に、冬の入江・高砂貝塚館へ、ぜひお越しください！

■開館時間 9時～17時（入館は16時30分まで）

■休館日 月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日）、祝日の翌日、12月30日～1月5日、入江貝塚公園、高砂貝塚公園は冬期間休園

